

2021(令和3)年度 入学試験問題

東大・医進クラス 2月1日 PM

国語

注意

- (1) 指示があるまで表紙を開かないこと。
- (2) 問題および解答用紙の両方に受験番号・座席番号を記入すること。
- (3) 声を出して読まないこと。
- (4) 解答は全て解答用紙の所定の欄らんに記入すること。

受験番号

座席番号

※問いに字数指定がある場合は、句読点なども一字として数えます。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ジャージの裾をめぐって、風汰ははだしのまま園庭に飛び出した。初日にお気入りのスニーカーを泥だらけにされてから、ずっとはだしだ。ぬめつとした土の感触が気持ち悪かつたはずなのに、思い切つてはだしで出てみると気持ちよくて、即ハマった。

「ねー、ふうたくん、ここほって」

りと君が、柄の長いスコップを引きずってきた。

昨日、園長に頼まれて園舎裏の小さな庭に大きな穴を掘ってから、園庭あそびのたびに子どもたちに、「ここ掘って！」とリクエストされている。ちなみに、裏庭に掘った穴はなにに使うのかと風汰が聞くと、園長はまだ決まっていなくて、「大きな穴があったら、おもしろいあそびができそうじゃない」と答えた。とりあえず、風汰がいる間に力仕事を、ということだったようだ。

「ほってほってー」

「やだよ、自分で掘れよ」

「だって、おおきなほりたいんだもん！ ほってー、ここほって、ここほって」

おまえは I かつ。

そう心でつぶやきながら、「しょうがねーな」と、風汰はスコップを受け取った。

ざくつ！

スコップを園庭のど真ん中にさしこむ。毎日繰り返し掘り返されている園庭の地面はやわらかい。気持ちいいくらい、土に食いこむ。

ざくつ、ざくつ、ざくつ、ざくつ

あつという間に、そこそこの穴が掘れた。スコップをとめて、腕で額の汗をぬぐう。

「おみず、いれていい？」

りとと君が、カラのバケツを振り回して言った。

「オッケー。水運んできな」

風汰は、水で土が崩れないように、掘り起こした穴の縁をスコップでばんばんと固めながら、隣にできた土の山を見た。

そういえば、チビの頃はよく砂山を作ったよなあ。でっかい山が作りたくって、でもなかなかうまくいなくて。って、いまならできんじゃね？

風汰は、シャベルで掘り起こした土をどんどん集めた。

どうせなら、うんとでかいのを！

と、さらに穴を広げて、山に土を盛った。気がつくど、山の周りに子どもたちが集まっていた。

「いーれーてー」

きりん組のそう君とこうたろう君が言うと、他の子たちも「いーれーてー」と言う。「いーいーよー」と、りくと君が返すと、子どもたちは一斉に肩ほどまである山を両手でぺたぺたやって、固め始めた。

「トンネルつくろー！」

こうたろう君が山に穴を掘る。

「お、いいねー。ならオレは」

風汰はままごと用のスプーンで山の斜面を削り始めた。てっぺんから裾野まで、くるくるとらせん状に溝をつくっていく。

「この溝に、ビー玉とかスパーボールを落として転がしてさー」

風汰は昔、夢中になってあそんだことを思い出しながら、慎重に山肌を削った。

よし、もう少しで完成だ！ と、ふといやな予感がした。こうたろう君たちが掘っているトンネルがやたらとでかい。

「あ、なあ、そんなに穴開けたら山が壊れ」

と、言った瞬間、「ばーん！」と雄叫びを上げて、こうたろう君が山をキックした。

「あっ」

うそだろ……。

風汰が呆然としていると、いままで熱心に山作りをしていた子たちが、嬉々として山を破壊しはじめた。

② やっぱ、子どもってやだ。

もうちよつとできあがるとこだったのに、オレの山。

水道の水を勢よく出して、泥だらけの手を洗いながら、もーぜってーあいつらと山なんて作らない！ と風汰が心に誓ったとき、つんとジャージを引っぱられた。

「またおまえかよ」

顔を向けると、かほちゃんだった。

そっか、しおん君は休みだったんだよな。

かほちゃんは、風汰のジャージをつかんだまま、反対の手で、おいでおいでをする。

「なんだよ」

「こっち」

かほちゃんはスッポンみたいにジャージをつかんだまま、ずんずん歩き出した。

「引っぱるなって、伸びるだろ」

園庭の隅すみまで行くと、かほちゃんは手を離はなした。

「あーあ、伸びちやっただじゃん」

風汰が言うと、かほちゃんは目に涙なみだを浮かべた。

え、うそ、泣くの？ 泣いちゃうわけ？ オレが悪いの？

「くろちゃんが」

「へっ？ くろちゃんって誰だれ？」

かほちゃんは、ふつと頬ほおを膨ふやらませた。

泣いたり怒おこったり、忙いそがしすぎる。

「くろちゃんは、くろちゃんだもん」と、うしろにあるウサギ小屋を指さした。

ああ、黒ウサギの「くろちゃん」。つて、そんなのわかるわけねーだろうつ、と喉のどもと元まで出かかった言葉をぐつと飲みこんだ。

さすがにここで、子どもを泣かすのはマズイ。

「で、くろちゃんがどうしたんだよ」

小屋の前にしゃがんだかほちゃんの隣となりに、風汰もしゃがんだ。かほちゃんは落ちているスティック状のニンジンすきまを拾って、小屋の隙間すきまか

らくろちゃんに差し出したけれど、くろちゃんは隅すみの方で、おはぎみたいに丸くなっている。

「ウサギ、さみしいとしんじやうんだって」

③ かほちゃんは、少し鼻にかかったような声で言う。

「マジで？」

「まきちゃんがいった」

「まきちゃんって誰じゅうい？ 獣医？」

「ジューイって？」

「動物のお医者さん」

「ちがうよ。おいしゃさんじゃないもん、まきちゃんのごねんせい。かほのおねえちゃんつ」

と威張^{いば}ったように言^いって、小屋を指でとんとんした。

「くろちゃんひとりぼっちでさみしいんだよ。だからすぐにげちやうんだもん」

ああ、今朝のウサギ脱走騒^{だつそうさわ}ぎのことか、と風汰はうなずいた。

「あのさ、逃^にげるのはこの小屋がボロだからだと思^{おも}うよ。センサーに直^{ただ}してもらえばいいんじやん」

「だめ！ さみしいとしんじやうんだもん」

「さみしくねーじやん」

かほちゃんが驚^{おどろ}いたように顔を上げた。

「わかんねーけどさあ」

見てみ、と風汰は園庭を指さした。

「あいつとか、そいつとか、おまえとか、いんじやん」

④ かほちゃんの頬^{ほお}が、ぼつと色づいた。

それからかほちゃんは、勢いよく風汰に抱^だきつき、風汰は背中から地面に倒^{たお}れた。ぐによつとした温かな土の感^{かん}触^{しよく}が、腰^{こし}のあたりからじわり伝わってきた。

「わーお！ 今日の泥^{どろ}んこチャンピオンは斗羽風汰君に決定！」

背中まで泥だらけになった風汰を見て、林田はおかしそうに笑った。

「どお？ サイズは合^あつてると思^{おも}うけど」

更衣室^{こうい}の戸の向こうから、林田がいまにも入^いりてきそうな勢いで声をかける。

「ちよつ、ちよつと待^{まち}つて」

⑤ 風汰は、鏡にうつった自分の姿に顔を引きつらせながら、あわててこたえた。

着替^{きが}えを持っていないという風汰に、林田が予備のジャージを貸^かしてくれた。それはよかつたけれど、どう見てもヘンなのだ。サイズがどうのという問題ではない。メンズものとレディースものでは、そもそもシルエット^{シルエット}が違^{ちが}う。おまけにピンク。ひとつにしはった前髪^{まえがみ}が、びよこびよこ動いて、悲しさを倍増させる。

「もう着替えたでしょ」

声と同時に、がらりと戸が開いた。

「……」

⑥ 林田は数回瞬きをして、なにも言わず戸を閉めた。向こうから、かすかな笑い声が聞こえた。だからやだつたんだ……。

ピンクのジャージを着て廊下を歩いていると、事務室から園長が出てきてにつこりした。

「あら、似合ってるじゃない」

「って、どんなセンスしてんだよ。」

ムツとしながら「ドーモ」と言うと、「ちよつと斗羽君にお願いしたいことがあるの」と腕を引いた。事務室に入ると、園長は風汰を園長の机の前に座らせて、開いた牛乳パックの束をどんと置いた。

「プール開きに魚釣りをするんだけど、そのときの魚を作ってほしいの」

「そう言つて、園長は牛乳パックのひとつにタコの絵を描いて、切り取つた。」

「こんな風に、タイでもサメでもウニでもなんでもいいから。色もつけてね。切り取つたら端つこに磁石のS極をビニールテープでとめる。簡単でしょ」

棒の先に紐をつけ、その先にN極の磁石をつけて釣り竿にするのだという。

「手作り釣り堀？」

「そうそう」

絵は嫌いじゃない。

早速下書きなしで、太いマジックを牛乳パックにあてた。

風汰が作業している間、園長は事務室を出たり入ったり、パソコンになにかを打ちこんだり、電話に出たりと忙しそうだったけれど、風汰は絵を描くことに集中していた。途中で小さいクラスの子がのぞきに来て、風汰が描いたエビを「ざりがに」と言つて喜んでいたので少々気になつたけれど、まあいいかと、ザリガニも追加した。

(いとう みく『天使のにもつ』による)

問一 〳〳〳線A〳Cの本文中の意味として最も適切なものを次のア〳エから選び、記号で答えなさい。

A 雄叫びを上げて

ア 奇妙な叫び声を上げて

イ 繰り返し叫び声を上げて

ウ 勇ましい叫び声を上げて

エ 耳障りな叫び声を上げて

B 呆然として

ア あっけにとられて

イ 途方にくれて

ウ 信じられないで

エ 悔しい思いで

C 嬉々として

ア 悪戯が成功したような顔で

イ 喜び楽しそうな様子で

ウ みんな夢中になって

エ 面白さを共有して

問二

I に入るものとして最も適切なものを次のア〳エから選び、記号で答えなさい。

ア 花咲かじーさんの犬

イ 浦島たろーのカメ

ウ こぶ取りじーさんの鬼

エ 桃たろーのキジ

問三 — 線①「ふといやな予感がした。」とありますが、どのような予感ですか。わかりやすく三〇字以内で説明しなさい。

問四 — 線②「やっぱ、子どもってやだ。」とありますが、どうして風汰はこのように思ったのですか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

ア 子どもたちだけでは作れないものを作り新たな遊び方を教えるために懸命に作業していたのに、気分が左右されがちな子どもたちは早々に飽きてしまつて全く言うことを聞いてくれなかったから。

イ 昔よりは力のある今だからできる作業を進めながら子どもたちと楽しみを共有するつもりで頑張っていたのに、子どもたちにはそんなつもりなどなくただ暴れることで満足してしまつていたから。

ウ 子どもたちのリクエストに对应してこれまであれこれ力を貸してきたというのに、昔の自分の夢を叶えようと夢中になっていることへの手助けはしてもらえず思いが一方通行であることに気づいたから。

エ 昔できなかったことも今ならできると夢中になって遊んだ過去を思い出しながら慎重に作業を進めていたのに、そんなことなどお構いなしの子どもたちの振る舞いで台無しにされてしまつたから。

問五 — 線③「かほちゃんは、少し鼻にかかったような声で言う。」とありますが、ここから読み取れる「かほちゃん」の気持ちはどのようなものですか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

ア 黒ウサギのくろちゃんがニンジン差し出しても反応してくれず、さみしさに加えて空腹で死んでしまうのではないかと切ない気持ち。

イ 黒ウサギのくろちゃんと同じく自分もさみしい気持ちでいることを風汰にわかつてもらいたいの、うまく言えなくてもどかしい気持ち。

ウ 黒ウサギのくろちゃんをみんなが大切にしないから小屋から逃げ出してしまふのだと、一人で正義感に燃えながらも泣きたい気持ち。
エ 黒ウサギのくろちゃんが小屋から逃げ出すほどにさみしさを抱えており、このままでは死んでしまふのではないかと不安な気持ち。

問六 ——線④「かほちゃんの頬が、ぼっと色づいた。」とありますが、ここから読み取れる「かほちゃん」の気持ちはどのようなもので
すか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

- ア 順番では自分が最後だったものの、風汰が自分を認めてくれてうれしくも恥ずかしい気持ち。
- イ 自分たちの存在があるからくろちゃんやんは死なないのだと教えられて、この上なくうれしい気持ち。
- ウ 自分を慰めるための嘘うそだとしても、くろちゃんやんが死なないような気がしてぼっとする気持ち。
- エ ウサギはウサギがいなときさみしいと思ひ込んでいた自分に気づかされた驚きと、感動の気持ち。

問七 ——線⑤「風汰は、鏡にうつった自分の姿に顔を引きつらせながら、あわててこたえた。」とありますが、どうしてですか。わかり
やすく説明しなさい。

問八 ——線⑥「林田は数回瞬きをして、なにも言わず戸を閉めた。」とありますが、ここから読み取れる「林田」の気持ちはどのような
ものですか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

- ア 意外にも自分の予備のジャージが似合っている風汰が急に戸を開かれて動揺している姿を見て、微笑ほほえましく思う気持ち。
- イ いつもは生意気な風汰が自分の予備のジャージを着て自信がなさそうにしている姿を、意地悪くも面白がる気持ち。
- ウ 自分の予備のジャージを着た風汰の姿が何とも言えず面白かったものの、さすがに直接笑うのは失礼だろうとこらえる気持ち。
- エ 着替え終わったと思ひ戸を開けたが、自分の予備のジャージ姿では出るに出不なかつたのだと気づき申し訳なく思う気持ち。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① あまり日本を知らぬ外人が、古い日本の旅館にとまって、いちばん驚き、困惑するものに襖がある。

今はもうそんな旅館には滅多にお目にかからなくなった。

I

、すこし前までは客室でも、全部一般の家と同じように襖で仕切られていたものである。案内された外人が、ホテルと同じ密室だと思ひこんでいると、その壁が音もなく左右に割れて女中がお茶をはこんで来る。隣室には見知らぬ客が寝ている。話もつつぬけだ。悪意があつたら泥棒はもちろん、殺人だつて意のままだろう。この紙の障壁は小指一本で音もなく「のりこえ」られるからである。心配で夜も眠られぬということになる。「日本の家は木と紙でできている」。この感想は単なるエキゾチズムによる鑑賞から得られたものでない。

「食卓についている赤い、美しい小さな木の実に注意しないといけない。あれは一個の爆弾である」——梅干をうっかり口へほうりこんでしまい、淑女（これは給仕している女中さんであろう）の前で、七転八倒している異人さんを想像していただきたい——それと同じ種類の、それよりはるかに骨身に徹する経験の産物なのである。

和辻哲郎博士は、この襖を日本の家族の人間関係の象徴としてとらえた。その解釈をヒントに、私の考えを進めて行くところとなる。「襖は、それをへだてとして使用する人々が、それをへだてとして相互に尊重し合うときのみ、へだてとしての役割を果たすへだてである」と、和辻博士はいう。ことはそれだけにとどまるまい。

II 部屋の中に人が居り、襖が閉ざしてあるときは、ある場合は「入つてくれるな」とか、ある場合は入るときには「合図をしてから」という意志表示である。

III

風よけのためだけで、何のへだても意味していないときもある。

内側でヒソヒソした話声が聞えれば「聞いてはならない」という意味である。この信号をうけとる側は、そこでそれが何を意味するか知らねばならぬ。「合図をしてくれ」という表示だと理解したとする。紙だからノックをする訳にはいかない。合図をしてくれという意味にもいろいろある。こちらが、その部屋に入りたいという要求にも、いろいろの種類がある。

「入つてもよいか」などという問いは、粗雑すぎる神経の持ち主がやることだ。「ドッコイショ」というようなかけ声をして、梯子段を登るとか、「今日は寒いなあ」と一人言をいっておいて挨拶なしにあける場合もある。「果物ないかしら」などという場合も、「ああ忘れものをした」という場合もある。「嫌だろうけど、これだけはお前さんについておかないとね」などという強制侵入の挨拶のときだつてあるだろう。もちろん、隣室に今、人がいるということを示しておく必要だけの場合もあるのだ。

こういうことから問題点が二つ出てくる。第一には、襖というへだてはまったく「不自然」なへだてだということである。変な例を挙げてみよう。

日本でライオンの人工飼育を成功させたのは、京都の市立動物園らしい。母親が檻から外に蹴り出してしまふ仔があつた。何度入れ直し

てやつても駄目だ。動物にはこういうことがよくある。親から見離された仔は餓死するか他の獣の餌食になるのだが、ここではそうはいかない。動物の元飼育係だった園長は苦心のすえ、自分の官舎で、はなし飼いにすることに成功した。よく遊びに行っていた私にもなつた。

こうなると、犬と同じようだが、いろいろちがう点がある。園長が呼ぶと飛んで来る。最短距離をとろうと、家の中だろうが何だろうが何でもはねとばしてやつて来る。このとき、彼は襖や障子は完全にへだてとは認めなかった。その存在さえも意識しなかったらしい。バリ、ズボンと大穴をあけてやつて来る。いくら叱つても駄目である。

視界をさえぎって障壁らしく見せてあるが、いったんそれがにせ物であると判つたら、よほどの訓練をしないと障壁としては作用しないのだ。襖は注連縄とまったく同じ意味を持つ。それは文化構造を同じくする人間にのみ通用する呪文としてのへだてでしかないのだ。まったくの象徴でしかないのである。

第二の問題点は、このような呪文としてのへだては、絶対禁止から最小限のへだてまで、無限の距離と種類をもつて作用するということだ。閉めてあるが、その閉めてあるということの意味は、どの程度の強さを持つのか客観的に表現する方法はまったく欠けているといつてよい。それをどうして正確に人に伝えることができるのか。

ここでは、信号の発信者ではなく、受信者の方に発信者の意志を正確にうけ取る能力が要求される。それは合理的な伝達手段でないものを理解する能力だから、著しく鋭い直観力だといえよう。日本の家庭は、その構成員が互にこの直観力を持ち合うことによって、はじめて円満に運営されるのである。

このことから、私たちの家庭は、成員の相互理解という点で、いろいろの長所や欠陥が生まれた。長所については後にふれる。欠陥をまず考えよう。

赤ん坊だっている意志を持つ。だが、赤ん坊は細かい表現はできない。手段としては泣き声と若干の身ぶりしか持ち合せていない。だが、鋭敏な親はその直観によつて、あらゆる要求をききわけることができる。それは本能的なものだ。生半可な知識は、かえつてその直観力を乱し破壊する（この点については松田道雄『私は二歳』に詳しい）。要するに、いつさいはこの直観で行なわれるのである。

大人に対しても、それで行けばよい。このことは逆に、直観力を持つ人たちにかこまれてある場合には、別にくわしい表現力を養う必要がないという結果を生む。こうして家内部でのコミュニケーションは、少数の単語と習慣づけられた身ぶりなどの象徴だけでこと足りるということになる。日本人が表情、みぶりに乏しいということもこういう理由があるのかもしれない。

読者は一度自分の家でのやりとりを録音して聞いてみられるとよい。記憶がうすれると、自分自身でも何のことを話していたのか、わからなくなるような対話で埋められているはずだ。

「おい、そのあの、あれはどうした」「ああ、あれ、すんだわよ」というたぐいなのである。

このことから、^④日本人は、家庭内では相互に「大きな赤ちゃん」としてしか待遇たいぐされないため、客観的な意志の表現力を獲得する訓練の機会がないという結果が生まれる。言語の一方の機能である感情の伝達はそれで充分じゅうぶんかもしれない。その点に関しては「目は口ほどに物をいい」ということもあるのだから、言葉の代用品は無数にある。

だが、意志の正確な伝達は言葉以外にはない。それに一つの家庭のいろいろの約束事は特殊とくしゆな個性的なものである。生活水準と生活様式が細分化して、社会構成が複雑になると、それが通用するのは家の内部でだけということになる。こうして日本人は共通の広場で発言する能力に著しく欠けているという結果が生まれるのである。広場が広いほどそうなる。^⑤国際会議場などで日本人の発言がないということは、外国語が下手だというだけの問題ではない。

※著者の表現を尊重し、原文のまま記載してあります。

(会田雄次『日本人の意識構造 風土・歴史・社会』による)

問一

I

III

 に入る語として最も適切なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア あるいは イ つまり ウ なぜなら エ しかし オ しかも

問二 ——— 線①「あまり日本を知らぬ外人が、古い日本の旅館にとまって、いちばん驚き、困惑するものに襖がある。」とありますが、どうして襖に「驚き、困惑する」のですか。「襖は」から始まる形で、本文中の言葉を用いて、わかりやすく説明しなさい。

問三 — 線②「襖はだてというへだてはまったく「不自然」なへだて」とありますが、ここで言う「へだて」とは、どのようなものですか。最も適切なものを次のア〜エから選び記号で答えなさい。

- ア 障壁を本物ととらえるかにせ物ととらえるかの感じ方は、呪文を理解する人間と理解できない動物では異なるということ。
- イ 障壁として通用するのは文化構造を同じくする人間と人間とのあいだのみであり、象徴ではないということ。
- ウ 障壁らしく見せかけてはあるが所詮しよせんにせ物であり、本物の障壁としての働きを持つことはないということ。
- エ 障壁であつても破壊することができてしまうので、経験次第で障壁と感じないようになるということ。

問四 — 線③「それをどうして正確に人に伝えることができるのか。」とありますが、客観的に表現されない内容が伝わるのは、どうしてですか。次の空欄くうらんに入る語句を字数指定に従って本文中より探し、抜き出して答えなさい。

1 (三字) に 2 (八字) があるから。

問五 — 線④「日本人は、家庭内では相互に「大きな赤ちゃん」としてしか待遇されない」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを次のア〜エから選び記号で答えなさい。

- ア 客観的な表現力がなくても、豊かな表情によつて感情が伝わり身ぶりによつて意志が伝わるということ。
- イ 意志を正しく伝えるために言葉を尽くそうとしても、わかっているからと言つて聞いてもらえないということ。
- ウ 家庭内ではいろいろな約束事があるため、わざわざ言葉に出すまでもなくたがいの意志を理解し合えるということ。
- エ 自分の意志をくわしく表現しなくても、少数の単語と習慣づけられた身ぶりなどで理解してもらえということ。

問六 ——線⑤「国際会議場などで日本人の発言がないということは、外国語が下手だというだけの問題ではない。」とありますが、「日本人の発言がない」ことの原因を筆者はどのように考えていますか。最も適切なものを次のア～エから選り記号で答えなさい。

- ア 家庭内に客観的な意志の表現力を獲得する訓練の機会がないため、約束事のない共通の場で発言する能力が欠けているということ。
- イ くわしい表現力などなくてもコミュニケーションが成り立つ経験を重ねてきたので、発言より重要なことがあると考えていること。
- ウ 言わなくてもわかってもらえる環境で育っているために察してほしい心情が先に立って、なかなか言葉が出てこないということ。
- エ 表情や身ぶりに乏しい日本人は発言していても印象が薄いため、国際会議場などでは目立った活躍ができていないということ。

問七 次のア～オについて、本文の内容と合うものにはA、合わないものにはBを書きなさい。

- ア 「日本の家は木と紙でできている」という異人さんのエキゾチズムによる鑑賞には、骨身に徹するような経験も含まれている。
- イ 襖が閉ざしてあるときに「入ってくれるな」の意か入るときには「合図をしてくれ」の意かは、信号をうけるとる側が把握する必要がある。
- ウ ライオンの仔には襖や障子が意味するところがわからなかったので、園長が呼ぶとそれらを壊しながら最短距離でかけつけた。
- エ 日本の家庭で成員の相互理解において生まれた欠陥とは、記憶が薄れると過去の対話の内容がわからなくなることである。
- オ 日本人の表情や身ぶりが乏しいのは、家の内部において特殊で個人的な約束事のなかでしかコミュニケーションを行っていないからである。

【三】 次の問いに答えなさい。

問一 次の文の「ばかり」と同じ使い方をしているものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

出来上がったばかりの料理は湯気を立てておいしそうだ。

ア 「気持ちばかりのものですが」と、お菓子^{かし}をいただいた。

イ 発売したばかりの本が、既に^{すで}売り切れていた。

ウ 自分ばかりが得をしているような気がする。

エ 油断したばかりに不意をつかれてしまった。

オ 目的地までは、あと二キロばかりだ。

問二 次の文の主語、述語を一文節で書き抜いて答えなさい。

自宅周辺の散策によって、新たな発見がいくつもあつた。

問三 次の□にア～オのいずれかを入れてことわざ・慣用句を完成させるとき、一度も使わないものを一つ選び、記号で答えなさい。

木に□をつぐ

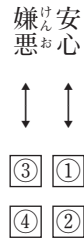
雨後の□のよう

水清ければ□住まず

□の甲^{こう}より年の功

ア 筍^{たけのこ} イ 魚 ウ 亀 エ 牛 オ 竹

問四 次の□にア～コのいずれかを入れて対義語を完成させるとき、①～④に入るものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



語群

ア	敵	イ	愛	ウ	朝	エ	危	オ	配
カ	重	キ	心	ク	不	ケ	好	コ	承

問五 次のア～エの文の順序を整えて意味の続きがはつきりした文章にするには、どのような順序にすればよいですか。はじめから順に記号で答えなさい。

- ア WHOはこのウイルスによる感染症かんせんしんじょうに、「コロナ(Corona)」「ウイルス(Virus)」「病気(Disease)」という単語と、「2019年」を組み合わせた「COVID-19」という病名をつけました。
- イ 過去の「スペイン風邪かぜ」「豚インフルエンザぶた」という呼び名によって生じた誤解や偏見へんけん、社会的な混乱への反省をふまえたものになっているのです。
- ウ これは「地理的な位置や動物、特定の個人や集団げんきゅうに言及せず、かつ発音しやすく、病気そのものに関係のある名前」というルールに基づいています。
- エ 新型コロナウイルスの「コロナ」は、ウイルスを電子顕微鏡でんしけんびきょうで見たときに表面に王冠おうかん(コロナ)のような突起とっきがついていたことによる名前です。

【四】 次の①～⑩について、――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 天守閣の再建が待たれる。
- ② あの力士は幕内になった。
- ③ とても太い絹糸だ。
- ④ ひどい興奮状態にあった。
- ⑤ 仏様に食べ物を供える。
- ⑥ 水がジョウキに変わる。
- ⑦ シュノウ会谈が行われた。
- ⑧ 絵のモチがわからない。
- ⑨ ピアノをエンソウする。
- ⑩ 神社をオガむ。

解答用紙

2021
(令和3)年度

国語
東大・医進クラス
2月1日 P.M

受験番号

座席番号

得点

三 問一 A 2
ウ
B 2
ア
C 2
イ 2
問二 2
ア

六 問三
と せ
い っ
う か
予 作
感 た
。 大
。 き
。 な
。 土
。 の
。 山
。 が
。 壊
。 れ
。 て
。 し
。 ま
。 う

四 問四 4
工
問五 4
工
問六 4
イ

六 問七
着替えたレディースもののピンクのシャリージ姿がどう見ても
おかしくて、見られなくなかったから。

四 問八 4
ウ
(別解)できれば見られたくないのに林田が入ってきそう
だったから。

三 問一 I 2
II
イ 2
III 2
ア

六 問二
襖は 悪意があったら泥棒も殺人も可能な、小指一本で音も
なくのリンネえられるものだから。

三 問三 4
イ 4
問四 1 2
受信者 2 3
著しく鋭い直感力

五 問五 4
工 4
問六 4
ア

七 問七
ア 1
B
イ 1
A
ウ 1
B
エ 1
B
オ 1
A

三 問一 4
イ
問二 主語 2
発見が
述語 2
あった
問三 4
工

四 問四
① 1
キ
② 1
オ
③ 1
イ
④ 1
ケ
問五 4
エ ↓
ア ↓
ウ ↓
イ

四 ① 蒸気
② まくろち
③ きぬいと
④ こうふん
⑤ そなえる
⑥ 首脳
⑦ 価値
⑧ 演奏
⑨ 拝む

1x10